

## 選択の自由

神は、人間を律法のもとにおかれたが、これは、人間が存在するためには、不可避の条件であった。人間は、神の統治に従う者であり、律法のない統治はあり得ない。神は、神の律法を犯す力のないものとして人間を造ることもおできになった。また、アダムの手が禁果にふれないように、彼の手をおさえることもおできになった。しかし、それでは、人間は道徳的自由意志の持ち主ではなくて、単なる機械人形になってしまう。**選択の自由**がないと、彼の服従は自発的なものではなくて、強制されたものとなる。品性が啓発されることもあり得なかったであろう。

～希望への光 P.22 人類のあけぼの 第2章天地創造のいわれ

### 人間の選択の自由 生き残る人びと 第4章 誘惑と墮落

神は、人類の始祖アダムとエバに善悪を知る木について訓戒をお与えになっていた。彼らは、サタンの墮落に関連したことや、サタンのそそのかしに耳をかたむけることの危険について、十分に知らされていた。神は、禁断の木の実を食べる能力を彼らからとりあげておしまいにならなかった。神は彼らを、神のみ言葉を信じ、神の誠(いましめ)に従って生きるか、それとも誘惑者を信じて神に従わずに滅びるか、そのどちらでも選ぶことのできる自由意志をもった人間として、お置きになった。彼らは(蛇の「目が開け、神のように善悪を知るものとなる」という言葉に唆され、)2人とも実を食べた。そして彼らの得た大いなる知恵というのは、罪の知識と罪悪感だった。身体をおおっていた光はまもなく消え、罪の意識と、天来の衣の失われたことから、寒気がおそってきたので、彼らは裸の身体をかくそうとした。

蛇は、アダムとエバに愛のしるしは何もあたえていなかったのに、彼らは蛇の言葉だと思って、その言葉を信ずる方を選んだ。蛇は、彼らの幸福と利益になることは何一つしていなかった。一方、神は、彼らに食べるのによいもの、見るのに美しいものの一切をお与えになっていた。目のとどくかぎり、どことして豊かさとしらに美しさにあふれていないところはなかった。それでもなおエバは、蛇にだまされて、自分たちをもっとかしこく、神のようにさえることのできる何ものかが保留されていると考えた。神を信じ、神に打ち明けることをしないで、彼女は卑劣にも神の恩恵を疑い、サタンの言葉を信じたのだ。

アダムは、罪を犯した後、最初は新しい、もっと高い境地にのぼったような気がした。しかしすぐに罪を犯したという思いにおびやかされた。今まであたたかだった空気が、ひえびえと感じられた。不義の夫婦は罪を意識した。彼らは、将来についての恐怖、欠乏感、魂の空虚を感じた。やさしい愛、平和、満ち足りた幸福な喜びがとり去られたように思え、その代りに、今まで経験したことのない、何か満たされない思いにおそわれた、彼らは初めて注意を外に向けた。彼らは、それまで身体に衣をまとわないで、天使たちのように光におおわれていたが、彼らをつつんでいたその光は消えていた。彼らは自分たちが、乏しく、裸であることを認めると、その思いからまぬかれるために、身体の衣をもとめることに注意を向けた。どうして衣をつけないで、神や天使たちの目の前に出ることができようと、彼らは思った。

アダムとエバの罪は、今やその正体をあらわした。彼らが神のあきらかなご命令を犯したその犯罪の性質は、だんだんあきらかになった。アダムは、エバが自分のそばを離れて、蛇に欺かれたおろかさを非難した。彼らは2人とも、自分たちを幸福にするために一切のものをお与えになっている神は、その大きな愛のゆえに彼らの不服従をみのがし、結局刑罰はたいして恐れるほどのものではないだろうとうぬぼれた。

サタンは事がうまくいったのを見て、こおどりして喜んだ。今や彼は女を誘惑して、神に対する不信を抱かせ、神の知恵に疑いを持たせ、神の全知全能の計画を見抜こうとさせたのだ。サタンはまたエバを通して、アダムもおしたのだ。アダムは、エバに対する愛のゆえに、神のご命令に従わないで彼女と共に墮落したのだ。

人類が墮落したというニュースは、全天にひろがり、琴は全部鳴りをひそめ、天使たちは悲しみのあまり、頭の冠を投げすてた。全天は動揺した。天使たちは、人類が、神から与えられていた豊かな恩恵に、亡恩をもってむくいたことを悲しんだ。不義の夫婦をどう処置したらよいかを決定するために会議が開かれた。天使たちは、アダムとエバが生命の木に手をのぼしてその実を食べ、罪の生活をつづけはしないかと恐れた。

神は、不服従の結果を知らせるために、アダムとエバのところへおいでになった。神がおごそかに近づいてこられる足音を聞くと、彼らは罪のない聖潔な身であった時分には、喜んでお迎えしたのに、今は神の御目から身をかくそうとした。「主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』。彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』。神は言われた、『あなたが裸であるのを、だれが知らせたのですか。食べるなど、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか』。」(創世記3：9～11) 神がこうおたずねになったのは、そのことをご存知でなかったからではなくて、**不義の夫婦に罪を自覚させるためだった**。どうしてお前たちは恥ずかしがり、恐れるようになったのだというのだ。アダムは、罪を認めたが、それは、自分のとんでもない不従順を後悔したためではなく、神を非難するためだった。

「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」。神は女に向かって「あなたは、なんということをしたのです」と仰せになった。エバは答えて、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」と言った。(創世記3：12、13)

#### のろい 生き残る人びと 第4章 誘惑と墮落

すると神は蛇へびに向かって、「おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最ものろわれる。おまえは腹で這いあるき、一生、ちりを食べるであろう」と仰せになった。(創世記3：14) 蛇は野の獣の中で高尚なものだったが、サタンの働きの手先になったので、今やそれらの中で最も劣ったものとされ、人に忌みきらわれるものとなった。「更に人に言われた、『あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのか。あなたは、ちりだから、ちりに帰る』。」(創世記3：17～19)

アダムとエバが善悪を知るの木の実を食べて、罪を犯したために、神は地をのろいたもうた。そして、「あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」と宣告なさった。(創世記3：17) 神はこれまで、彼らに幸福だけを与えて、不幸を与えないでおかれた。今神は、彼らに善悪の木の実を食べさせる、すなわち彼らは一生の間、悪というものを知らなければならぬと宣告なさった。

**それ以来人類は、サタンの誘惑にたえず苦しめられることになった**。これまで楽しんできた幸福で愉快的な労働の代りに、いつまでも絶えることのない苦勞と心配の生活を、アダムは送らねばならなかった。彼らは失望し、悲しみ、苦しみ、ついには死なねばならぬのだ。**土の塵をもって造られた彼らは、ふたたび土の塵ちりに帰らねばならぬのだ**。

アダムとエバは、エデンの家郷を失わねばならぬことを知らされた。彼らは、サタンの欺瞞に負けて、神は、うそつきだというサタンの言葉を信じた。彼らの犯罪によって、サタンが一層たやすく彼らに近く道が開かれた。彼らがこれまでどおりエデンの園に居ることはよくなかった。なぜなら、罪の状態のまま生命の木の実を食べて、いつまでも罪の生活をつづけるおそれがあったからだ。彼らは幸福なエデンに居る権利を一切失ってしまったことを認めたが、しかし園に残ることを許していただきたいと嘆願した。これからは神に絶対的に服従しますと彼らは約束した。**けがれの無い状態から不義へ転落したことによって得られたものは、力ではなくて、大いなる弱さであることを彼らは教えられた**。けがれの無い、幸福な、聖なる状態にあった時に、きよい心を保つことができなかったのだから、罪を意識するようになった今の状態では、真実と忠誠を保つ力はますますない。彼らは、はげしい苦痛と後悔の念に満たされ、**罪の罰は死だということを、今認めた**。

天使たちは、ただちに生命の木にいたる道を守るように、命令をうけた。

アダムとエバが、神に従わないで、神の不興をこうむったのちも生命の木の実を食べて罪の生活をつづけるようにというのが、サタンのたくらんだ計画だった。しかし聖天使たちは、生命の木にいたる道をさえぎるためにつかわされた。天使たちのまわりには、四方にきらめく光があって、それは輝く剣のように見えた。

→聖書全体をとおして、神はやさしい父であるばかりでなく、公正な審判者としてあらわされている(マタイ25：41)。～希望への光 P.244 人類のあけぼの 第43章